

入門歲時記

角川小辞典

30



大野林火監修
俳句文學館編



啓執

啓蟄を啣へて雀飛びへて雀飛びへて雀飛びへて雀飛び
啓蟄の蚯蚓の紅のす蚓の紅のす蚓の紅のす蚓の紅のす
啓蟄や指反りかへる反りかへる反りかへる反りかへる

●すいちゅうか

水中花

泡一つ抱い 泡一つ抱い 泡一つ抱い 泡一つ抱い
水中花 培ふ 水中花 培ふ 水中花 培ふ 水中花 培ふ
水中花 子の 水中花 子の 水中花 子の 水中花 子の

●うらがれ

末枯

ひかり飛ぶものあまふものおもものあま
末枯れの陽よりも濃陽よりも陽よりも濃
おほはこの葉は末枯の葉は末枯葉は末枯

ラダビ

ラクビーのジャケツちぎれて開へる誓子
ラクビーや敵の汗に触れて組む草刈
書庫守に声なきラクビー玻璃戸走す草田里

冬

総ルビ付・一句鑑賞

●初めて俳句を作ろうとする人、俳句を作り始めて間もない初心者のために、現代生活に密着している季語

角川小辞典

30

入門歳時記

野林火監修
俳句文学館編

角川書店



入門歳時記

著者・大野林火

発行者・角川春樹

印刷者・中村 武

製本者・若林義一

発行所・角川書店

長野市旭町一〇九八

東京都板橋区舟渡三の二十の十三

東京都千代田区富士見二の十三の三・郵便番号102

振替口座 東京三一 一九五二〇八・電話03(265)七一一(代)

初版・昭和五十五年五月二十日発行

装丁・代田 埏

製版印刷・信教印刷 製本・若林製本

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

0592-063000-0946(0)

©Printed in Japan

著者・執筆者紹介

大野 林火^{おのの りんか} 明治三十七年三月横浜市

生まれ。本名正^{まさし}。東京大学経済学部

卒業。「浜」主宰。俳人協会会長。句

集『海門』『冬雁』『白幡南町』『潺湲

集』『飛花集』など。主要著書に『現代

の秀句』『高浜虚子』『戦後秀句』『近代

俳句の鑑賞と批評』などがある。

村田 脩^{むらた おさむ} 「風花」同人。俳人協会

理事。雙葉学園教頭。

桶笠^{かがし} 文^{ふみ} 「春燈」同人。俳人協会

幹事。東京・上目黒小学校教諭。

鎌和田 柚子^{かまわだ ゆずこ} 「萬緑」同人。関東学院

女子短期大学講師。

北澤 瑞史^{きたざわ みずし} 「鹿火屋」同人。藤嶺学

園藤沢高等学校教諭。

島谷 征良^{しまや せいりょう} 「一葦」「風土」同人。神

奈川県立高浜高等学校教諭。

序

ここ数年、歳時記ブームである。毎年のように新しい歳時記が誕生、収録季語数も四千とも五千ともいわれ、その多きを誇っている。そこには必ず新しい季語も加えられているが、これは私たちの生活の行動範囲が広がったからである。これをいえば登山が盛になれば高山植物が、野草・野鳥を探ることが盛んになれば、野草・野鳥が、民俗行事を探ることが盛んになればその種の行事が私たちの生活に入ってくるためである。これを阻止することは出来ない。新季語の出現にはそれだけの理由があるのである。また、それによって作句上便利を受けていることも認めなければならぬ。

こんな訳で歳時記の収録季語数は殖える一方であるが、しかし、それを一実作者の立場に戻って言えば、一人の作家が一生に用いた季語の数は千乃至千五百もあれば多い方であろう。しかし、その作家が年々繰返し用いる季語の数でいえば、或は百を出ないかも知れない。多く見ても数百あればまず以て不自由することはない。それは私の実作経験を土台にしているのであるが、親しき友の二、三に聞いただけでも同じようなことであった。具体的にいえば、雪・月・花を頂点に数百の季語があれば充分日常の作句には事足りるということである。

今回、俳句文学館が歳時記刊行ブームの中で、敢て新しく歳時記の編纂を企てたのは初めて俳句を作ろうとする人々のための実用的な歳時記の見当らぬためである。従来、歳時記に対し、季寄せという簡便なものがあるが、これは歳時記の縮刷版といってよく、ここでも季語の収録数に心が配られる

反面、季語解説が必ずしも充分とはいえない。従って季寄せは簡便だが初めて俳句を志す人を満足させるものでない。

季語解説を懇切に施し、しかも、日常の実作に不自由なくするには季語を実作向きに選びださねばならぬ。この作業は容易でない。各人各様の生活環境があるからだ、それでも最大公約数を採ればほぼ目的は達せられる。各編纂委員は各自の豊富な実作経験を生かし、何回も会合を重ねてこの作業に当り、現代生活に密着している季語約八百を選んできた。これだけあればまず以て日常の作句に不自由はない。そして、その季語に懇切・丁寧な解説を施してくれた。所期の目的はこれでほぼ達せられたと思う。

例句にルビを付したが、これは従来 of 歳時記になかったことで、この歳時記を読み易く、親しみ易いものにしたと思う。その上、各季語に一句例句鑑賞を付したことはこれも従来 of 歳時記になかったことで、この鑑賞を読むことで読者は季語の一句に占める位を知り、作句の機微をおのずから知ることになると思う。この歳時記が歳時記であるとともに俳句入門を兼ねる理由である。

俳句人口はこのところ急増した。それに応えて歳時記、俳句入門書も次から次と刊行されている。しかし、歳時記が入門書も兼ねているというものはない。この「入門歳時記」はその渴望に応えたものである。おすすめしたい。

昭和五十五年仲春

大野 林 火

凡 例

一、季の配列は春・夏・秋・冬・新年の順にした。

一、各季の巻頭に、それぞれの季を概観して解説をなした。春・夏・秋・冬がそれぞれ一年のどの期間にあたるか、この区分は氣象学上または西洋暦の区分とどう違っているかを明らかにした。また、歳時記の特徴として新年を独立させ季とした理由も説明し、歳時記の上の各季のもっともよくその季感を表現する情趣をも簡潔にまとめて示したいと考えた。

一、季の中の季題は、精選して代表的なもの約八〇〇題に限った。季題・季語の選択は編集委員により検討・討議し、決定した。季題の配列は動物・植物などの項目でまとめたところもあるが、おおむねは季の中でさらに季節の推移が理解できるように、季節順になるように配慮した。

一、季題解説はできるだけやさしい記述を心がけた。また、読み物としての歳時記となるようにと考え、一般的な概説より興味ある叙述にと努めた。

一、季題の各項目の下（ ）内に歴史的仮名づかいによるふり仮名を付した。その他解説文中にはなるべく多くふり仮名を付したが、それは現代仮名づかいによった。

一、季題の各項目の下に並べあげた季題は、主にその季題の異名またはその季題に準じて用いられる

ものをあげた。解説末尾に付した季題は、関連して用いられるものの主なものを示した。

一、季題解説中にあげられた別の季題はゴシック体で示し、その解説によって季題項目の不足を補うようにした。

一、例句は古典より現代まで広く収載した。*印を付し、例句中の一句に鑑賞を施し、季題の情趣の理解に役立つようにした。

一、例句の仮名づかいは歴史的仮名づかい、用字は当用漢字体を用いたが、入門者用として、すべての例句に現代仮名づかいによるふり仮名を施した。

一、例句の作者は古典作家は号のみ、近・現代作家は姓名（姓号）を掲げた。

一、読者の便を計って、目次及び分類目次のほかに、巻末に本題・異名・別名などの五十音総索引（約二五〇〇語）を付した。

季題解説及び鑑賞執筆分担

時候・天文	村田 脩
地理・行事	鍵和田 祐子
生活	北澤 瑞史
動物	樋笠 文
植物	島谷 征良
編集協力	宮下 翠舟

誘蛾燈 田植 枇杷 紫蘇 青梅 ゆすらうめ さくらんぼ 桑の実 河鹿 青蛙 蕨 蚯蚓 蛞蝓 蟹 濁り 鮒 黴 五月 出梅 入梅
燈 植 杷 蘇 梅 め ぼ 実 鹿 蛙 蕨 蚯 蛞 蟹 濁 鮒 黴 月 水 雨 梅

三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

蜘蛛 蠅 蚊 青 鯉 夜 鶉 鮎 草 藻 藻 河 萍 熱 水 ま 通 浮 螢 火
蛛 切 芒 釣 飼 取 刈 花 骨 帶 馬 しま し 鴨 巢 取 虫
も き ぎ かい かり ば ね ぎ ば ひ

四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四

蛇 苺 星 夏 緑 万 閑 時 老 夏 薫 青 南 蝙 蚊 蚊 蚤 蚊 蟻 蟻
母 顔 草 蔭 緑 古 鳥 鴛 至 風 嵐 風 蝠 火 帳 獄 獄
い ち ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ ざ

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

夕 雲 青 夾竹 合 月 水 百 簾 青 暑 桜 青 羽 電 竹 螢 蜥 蛇
立 峰 田 桃 飲 見 芭 合 椅 簾 し 桃 驚 拔 落 袋 地 蛇
ち ね た ち 花 草 蕉 の 子 簾 忌 鳥 葉 袋 け け け
か ね ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二

涼^{すず}滴^た泉^い滝^{たき}雲^{うん}雪^せお登^{のぼ}山^{やま}夏^{なつ}鬼^{おに}毛^け兜^{かぶと}金^こ龜^{かめ}天^{てん}道^{だう}日^ひ花^{はな}団^{だん}虹^{にじ}
 羅^らしり海^{うみ}溪^{たに}烟^け山^{やま}開^{ひら}の山^{やま}市^{いち}虫^{むし}虫^{むし}虫^{むし}傘^{かさ}塵^{ちり}扇^{あふ}

二〇八
二〇八
二〇九
二〇〇
二〇〇
二〇一
二〇一
二〇二
二〇三
二〇四
二〇四
二〇五
二〇六
二〇六
二〇七
二〇七
二〇八
二〇九
二一〇
二一一
二一一
二一二
二一二
二一三
二一三
二一四
二一四
二一五
二一六
二一六
二一七
二一七
二一八
二一九
二二〇

ラム 水^{みづ} 麦^{あわ} 冷^{ひや} 冷^{ひや} 胡^こ瓜^{きうり} 夏^{なつ} 夜^よ 夜^よ 花^{はな} 髪^{かみ} 打^{うち} 端^{はし} 納^す 露^ろ 噴^ふ 白^{しろ} 汗^{あせ} 汗^{あせ} 浴^ゆ
ネ 水^{みづ} 湯^ゆ 奴^こ 麦^{あわ} も 月^{つき} 濯^{すす} 店^{みせ} 火^ひ 洗^{あら} 水^{みづ} 居^ゐ 涼^{すず} 台^{だい} 水^{みづ} 靴^{くつ} 拭^{ぬぐ} 衣^か

[illegible]

西^{にし} 片^{かた} 昼^{ひる} 炎^{えん} 炎^{えん} 朝^{あさ} 花^{はな} 水^{みづ} 水^{みづ} 松^{まつ} 金^{きん} 走^{そう} 風^{ふう} 洗^{あら} 鮎^{あひ} 飯^い 葛^{くわ} 心^{こころ} 枝^{えだ} 麦^{むぎ}
日^ひ 蔭^{かげ} 寝^ね 昼^{ひる} 天^{てん} 曇^{曇り} 氷^{こおり} 花^{はな} 遊^{あそ} 葉^は 葉^は 魚^い 燈^{とう} 鈴^{りん} 臈^{ろう} 釀^る 餅^{もち} 太^た 豆^{まめ} 酒^{さけ}

二四一
二四二
二四三
二四四
二四五
二五六
二五七
二五八
二五九
二六〇
二六一
二六二
二六三
二六四
二六五
二六六
二六七
二六八
二六九
二七〇
二七一
二七二
二七三

虫じ土ど帰き避ひ浜は舟を夜海水海プヨ日裸は蟬喜草旱灼夕
干じ用よ省い暑し綿虫じ虫月け着き浴とルト焼雨きれく焼

二四三
二四三
二四四
二四四
二四五
二四六
二四六
二四七
二四七
二四八
二四九
二四九
二五〇
二五〇
二五一
二五二
二五二
二五三
二五三

河^{かつ}童^ば忌^い 病^び日^に紅^{こう} 百^{ひゃく}日^に紅^{こう} 驚^{おどろ}草^{そう} 政^{せい}日^に草^{そう} 百^{ひゃく}日^に草^{そう} 向^{むか}日^に葵^{あひ} 御^ご日^に葵^{あひ} 茄^か子^す 蓮^{れん}の^の花^{はな} 蓮^{れん}の^の花^{はな} 睡^{すい}蓮^{れん} 蒲^ぼ蓮^{れん} 夕^{ゆふ}顔^{がほ} 夏^{なつ}瘦^{やせ} 天^{てん}瓜^か粉^{こな} 香^{かう}水^{すい} 土^ど用^{よう}鰻^{うなぎ} 土^ど用^{よう}浪^{なみ} 梅^{うめ}干^{ほし} 紙^し魚^{いそ}

二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

稻^{いね}妻^{つま} 新^{あらた}涼^{すず} 残^{のこ}暑^{あつ} 秋^{あき}の^の蟬^{せみ} 終^{しゅう}戦^{せん}記^き念^{ねん}日^び 流^{なが}燈^{とう} 踊^{おど} 墓^{はか}参^{まゐ}り 孟^{もう}蘭^{らん}盆^{ぼん} 天^{あま}の^の川^{がわ} 七^{なな}た^たば^ば夕^{ゆふ} 星^{ほし}月^{づき}夜^よ 桐^{きり}一^{いつ}葉^は 立^たり^り秋^{あき} 秋^{あき} 晩^{ばん}夏^か 夜^よの^の秋^{あき} 秋^{あき}近^{ちか}し

二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

夜^よな^なべ 夜^よ学^{がく} 燈^{とう}火^か親^{しん} 夜^よ火^か長^{なが} 芋^{いも}風^{ふう} 野^の分^{わけ} 台^{たい}風^{ふう} 二^{ふた}百^{ひゃく}十^{じゅう}日^{にち} 不^ふ知^ち火^か 芭^ば蕉^{せう} カンナ 赤^{あか}の^のま^まん^ま 大^{だい}根^{こん} 大^{だい}豆^{まめ} 朝^{あさ}顔^{がほ} 白^{しろ}粉^{こな}花^{はな} 鳳^{ほう}仙^{せん}花^{はな} 木^きの^の椋^{けい} 芙^ふ蓉^{じよう} 流^{なが}星^{せい}

二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

衣^き被^か 芋^{いも} 無^む名^な 月^{つき} 月^{つき} 敬^{けい}老^{ろう}の^の日^ひ 蟪^{かい}蛄^こ 養^{やう}虫^{ちゅう} 蠡^り 蟋^{せつ}蟀^{せつ} 虫^{ちゅう} 露^る 萩^{はぎ} 葛^{くわ} 桔^き梗^{きやう} 撫^な子^し 芒^{すすき} 秋^{あき}の^の七^{なな}草^{くさ} 花^{はな}野^の 夜^よ食^{しょく}

二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

コスモス	竜胆	秋海棠	草の花	竹伐る	竹の春	鯊	鮭	鰯	秋刀魚	秋の海	鶏頭	曼珠沙華	燕帰る	雁	穴まどひ	秋彼岸	蜻蛉	霧	子規忌
------	----	-----	-----	-----	-----	---	---	---	-----	-----	----	------	-----	---	------	-----	----	---	-----

三五	三四	三三	三三	三三	三三	三二	三〇	三〇	三〇	二九	二八	二八	二七	二六	二六	二五	二五	二四	二三	二三
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

赤い羽根	秋の思	秋の雨	秋の暮	秋の聲	秋の風	馬肥ゆる	秋高し	九月尽	水澄む	冷やか	爽やか	木犀	玉蜀黍	貝割菜	唐辛子	鬼灯	糸瓜	蕎麦の花	露草
------	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	----	----	------	----

三六	三六	三五	三四	三四	三三	三三	三三	三三	三二	三二	三〇	三〇	三九	三九	三八	三七	三七	三六	三五
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

梨石	石榴	林檎	秋の芽	木の実	啄木鳥	鵲	鴉	色鳥	渡り鳥	落鮎	鹿火屋	案山子	ばつた	蝗	稲	新酒	新米	菌	運動会
----	----	----	-----	-----	-----	---	---	----	-----	----	-----	-----	-----	---	---	----	----	---	-----

三六	三七	三七	三六	三六	三五	三四	三四	三四	三三	三三	三三	三三	三三	三〇	三〇	二九	二八	二六	二七
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

冷まじ	夜寒	朝寒	砒	後の月	野菊	菊	菊人形	菊	重陽	秋祭	松手入	烏瓜	新松子	椿の実	通草	葡萄	無花果	柿	樽
-----	----	----	---	-----	----	---	-----	---	----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	---	---

三〇	三〇	二九	二九	二八	二八	二七	二六	二五	二五	二四	二四	二三	二三	二三	二二	二二	二〇	一九	一九
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

錦^{にしき}木^き 紅^{こう}葉^え鮎^{あは} 紅^{こう}葉^え狩^{かり} 紅^{こう}葉^え 秋^{あき}深^{ふか}し 柚^ゆ子^こ 梅^{うめ}擬^ぎ 障^{しょう}子^し貼^てる 藥^{くすり}塚^{づか} 落^{おち}穂^ほ 刈^{かり}田^で 稲^{いね}刈^{かり} ゐのこづち 胡^こ桃^{もも} 団^{だん}栗^り 栗^り飯^い 敗^{やぶ}荷^か 蘆^{あし}刈^{かり} 身^み入^いむ そぞろ寒^{さむ}

𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

石^{いし}落^{おち}の花^{はな} 八^や手^ての花^{はな} 柊^{ひいらぎ}の花^{はな} 山^{さん}茶^ち花^{はな} 茶^ちの花^{はな} 西^{せい}の市^{いち} 炉^ろ開^{ひら}き 神^{かみ}の留^{りゅう}守^{しゅ} 神^{かみ}無^な月^{げつ} 初^{はつ}冬^{ふゆ} 立^た冬^{ふゆ} 冬^{ふゆ} 冬^{ふゆ} 冬^{ふゆ} 行^ゆ末^{まつ} 猪^{いのしし}鹿^{しか} 黄^{わう}落^{おち} 鶯^う

𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

短^{たん}網^{あみ} 冬^{ふゆ}時^{とき}雨^{あめ} 風^{ふう} 木^きの葉^は髪^{かみ} 落^{おち}葉^は 紅^{こう}葉^え散^{さん}る 掃^{はき}り花^{はな} 冬^{ふゆ}晴^{はる} 小^こ春^{はる} 鷹^{たか} 茎^{くき}漬^{づけ} 沢^{たく}庵^{あん}漬^{づけ} 切^き干^{かん} 大^{だい}根^{こん}干^{かん}す 七^{しち}五^ご三^{さん}の祝^い 芭^ば蕉^{しょう}忌^き 蜜^{みつ}柑^{かん} 大^{だい}根^{こん}

𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

風^{ふう}呂^ろ吹^ふ 冬^{ふゆ}萌^も 枇^び杷^ぱの花^{はな} 枯^{かれ}菊^{きく} 枯^{かれ}芝^{しば} 枯^{かれ}蓮^{れん} 枯^{かれ}尾^び花^{はな} 枯^{かれ}華^か 枯^{かれ}草^{くさ} 冬^{ふゆ}ざれ 冬^{ふゆ}枯^{かれ}木^き 息^{いき}白^{しろ}し 冷^{れい}たし 寒^{さむ}し 鴨^{かも} 水^{みづ}鳥^{とり} 木^き菟^う 顔^{かお}見^み世^せ 冬^{ふゆ}日^ひ

𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔 𠂔

河豚 河 冬 都 笹 狩 冬 熊 枯 山 玉 湯 焼 お 寄 干 白 根 葱 雑
汁 豚 海 鳥 鳴 眠 野 眠 子 豆 腐 芋 鍋 菜 菜 汁 炊

三九九
四〇〇〇
四〇〇〇
四〇〇〇
四〇〇一
四〇〇一
四〇〇一
四〇〇二
四〇〇三
四〇〇四
四〇〇五
四〇〇五
四〇〇六
四〇〇六
四〇〇六
四〇〇八
四〇〇九
四〇〇九
四〇一〇
四〇一〇
四〇一一

蒲^か 風^か 湯^ゆ 湯^ゆ 炬^こ 暖^{だん} 囲^い 櫓^ろ 焚^{たき} 炭^{すす} 炭^{すす} 炭^{すす} 冬^{ふゆ} 冬^{ふゆ} 綿^{わた} 牡^牡 海^{うみ} 乾^{かわ} 鱈^{たら} 鮫^{さめ}
団^{だん} 邪^や め 婆^ば 縫^{ぬい} 房^ふ 裡^{うち} 火^か 焼^{やき} 団^{だん} 籠^{かご} の 蜂^{はち} 虫^{むし} 蠅^は 鼠^{ねずみ} 鮭^{さけ} 鱈^{たら}

四二一
四二二
四二三
四二四
四二五
四二六
四二七
四二八
四二九
四三〇
四三一
四三二
四三三
四三四
四三五

襪はき 綿わた 毛け 着き 冬ふゆ マスク 襟えり 手て 外が 懷ふとこ 手て 日ひ 糸いと 紙かみ 一いっ 空から 虎こ 霜しも 夜よ

四三五
四三六
四三七
四二八
四二九
四三〇
四三一
四三二
四三三
四三四
四三五
四三六

年の餅 年とし 歳さい 煤すす 羽子う 年のとし 年とし 日記に 曆に 師に クリスマス 蕪村 柚子 冬 火 水 糞 雪 雪
の暮 忘 暮 払 板 市 意 買 売 走 マス 忌 湯 至 事 滴 る 雪 雪
の暮 忘 暮 払 板 市 意 買 売 走 マス 忌 湯 至 事 滴 る 雪 雪

四三六
四三七
四三七
四三八
四三九
四四〇
四四〇
四四一
四四一
四四二
四四二
四四三
四四三
四四四
四四五
四四五
四四六
四四六
四四七
四四七
四四八

雪ゆき女むすめ郎らう　　ラグビー　　スキー　　雪ゆきまろげ　　雪ゆき搔か　　雪ゆき起おこし　　風かぜ花はな　　霞あられ　　悴かじむ　　三さん寒かん四し温おん　　牙やゆ　　凍こる　　寒かん鯉こい　　寒かん卵たまご　　除じよ夜よの鐘かね　　除じよ夜よ　　年とし惜おししむ

四四八
四四九
四四九
四五〇
四五〇
四五一
四五一
四五二
四五二
四五三
四五三
四五四
四五四
四五五
四五五
四五六
四五六
四五七
四五七
四五七
四五八
四五八
四五九

室^{むろ} 佐^さ 探^{たん} 臘^{ろう} 日^ひ 脚^{あし} 伸^{のびる}
 麦^{むぎ} 水^{みづ} 冬^{ふゆ} 寒^{かん} 葉^は 千^{せん} 白^{しろ} 凍^こ 寒^{かん} 煮^に 寒^{かん} 避^ひ 水^{みづ} 水^{みづ}
 咲^{さく} 助^{すけ} 梅^{うめ} 梅^{うめ} 芽^め 仙^{せん} 薇^ゐ 菊^{きく} 丹^{たん} 兩^{りやう} 鳥^{とり} 蝶^{ちょう} 雀^{すずめ} 癩^{こり} 寒^{かん} 垢^か 離^り 寒^{かん} 柱^{ちゆう}

四六〇
四六一
四六二
四六三
四六四
四六五
四六六
四六七
四六八
四六九
四七〇
四七一

破^は魔^ま弓^{ゆみ} 初^{はつ}詣^{よみ} 若^わ水^{みづ} 淑^{しゆく}氣^き 御^ご降^{ふり} 初^{はつ}風^{ふう} 初^{はつ}空^{くう} 初^{はつ}日^ひ 初^{はつ}雀^{すずめ} 元^{げん}日^{じつ} 初^{はつ}春^{はる} 去^こ年^{ねん}今^{こん}年^{ねん} 新^{しん}年^{ねん}

追^お節^{せつ} 春^{はる}隣^{となり} なまはげ 儼^{げん}分^{ぶん} かまくら

新 年

四七一
四七二
四七三
四七四
四七五
四七六
四七七
四七八
四七九
四八〇
四八一
四八二
四八三

獅子舞ししまい　絵双六えそうりく　歌留多かろうた　正月の風しょうげつのかぜ
追羽子おいうばこ　独楽どがく　手廻てまわ　春はるはる　福寿草ふくじゅうそう
歯鏡はかがみ　飾門かざりかど　食く　雑煮ぞうに　年とし　初賀はつが　年とし　年とし
玉賀たまが　状じょう　酒いさけ　暦れき　祝いわい

四八三
四八三
四八四
四八五
四八五
四八六
四八七
四八七
四八八
四八九
四八九
四九〇
四九〇
四九一
四九一
四九二
四九二
四九三
四九四
四九四
四九五
四九五